



『百人一首かるた』

No. 75

目次

- ◆2 一茶の正月 矢羽 勝幸
- ◆3 人生に於ける三つの出会い 青山 忠一
- ◆4 <思い出の一冊>『駱駝の様子』 齋藤 喜代子
- ◆5 <自著を語る>『江戸の恋の万華鏡—『好色五人女』』 竹野 静雄
- ◆6 <自著を語る>『日本の民俗信仰』 谷口 貢
- ◆7 本学教員著書一覧
(2008年11月1日~2009年10月31日受入分)
- ◆8 柏市立図書館・市内大学図書館
合同企画展・講演会

季報

二松学舎大学附属図書館

文学部
国文学科 教授 矢羽 勝幸

小林一茶を代表する作品に
めでた め くら くら
目出度さもちう位也おらが春

がある。この句は、よく知られる『おらが春』の題名にもなった作品で、この本以外に自筆の記録は一切ない。

さて、この句の本当の意味はどのようなものであろうか。一般的には、「ちう位」は一茶の住んだ長野県の方言「ちゅうくれえ」（いいかげん・適当・でたらめ）の意味だとされている。しかし、この句の長い前文を読むとどうもそうには思えない。『おらが春』という自ら板下まで書いて出版を考えていた序文に据えた句文だ。一茶のこの頃（晩年）の作品や思想を考えると、とても通説には賛成しかねる。

とにかくこの作品は『おらが春』にしかなく、しかも長文の末に記されている。この文章を考慮に入れない解釈が多いが、それは一茶の本意に背くというものであろう。

ここにその全文を出すスペースはないので大よその大意を紹介してみよう。

文章は全体が二段に分かれていて、まず最初に『沙石集』（仏教説話集）から京都府普甲寺のある奇僧（寛印）の逸話を紹介している。寛印は、日頃極楽往生を強く望み、大晦日から元旦にかけて一計をめぐらす。寺で使う小坊主を極楽からの使者と見立て、寛印が阿弥陀如来になって自身へ宛てて書いた手紙を小坊主に託す。小坊主は言われたとおり、元日の朝、寛印の手紙（すなわち阿弥陀からの手紙）を持って改めて寺門を叩き来訪する。予め知っていたはずの寛印は走り出てこの極楽からの使者を丁重に迎え、自らの書いた極楽への招待状を読んで感涙にむせぶ、というもの。

第二段は、この狂気に近い行為をした寛印への批評と世俗の正月の迎え方を記す。現世を速やかに去って極楽往生を願う寛印に対し、世間一般の人々は、一日も多く現世に留り、長寿であることを願う。

一茶はいう、「（世俗の）鶴亀にただへての祝尽しも厄やく払ひの口上こうじょうめきてそらぞらしく思うからに、から風の吹けばとぶ屑家くずやはくづ屋（ママ）のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路まがなの曲り形りに、ことしの春もあなた（阿弥陀）任せになんむかへける」と。つまり、一茶の正月の迎え方は、寛印のように早く現世を去ろうというものでも、世俗のよ

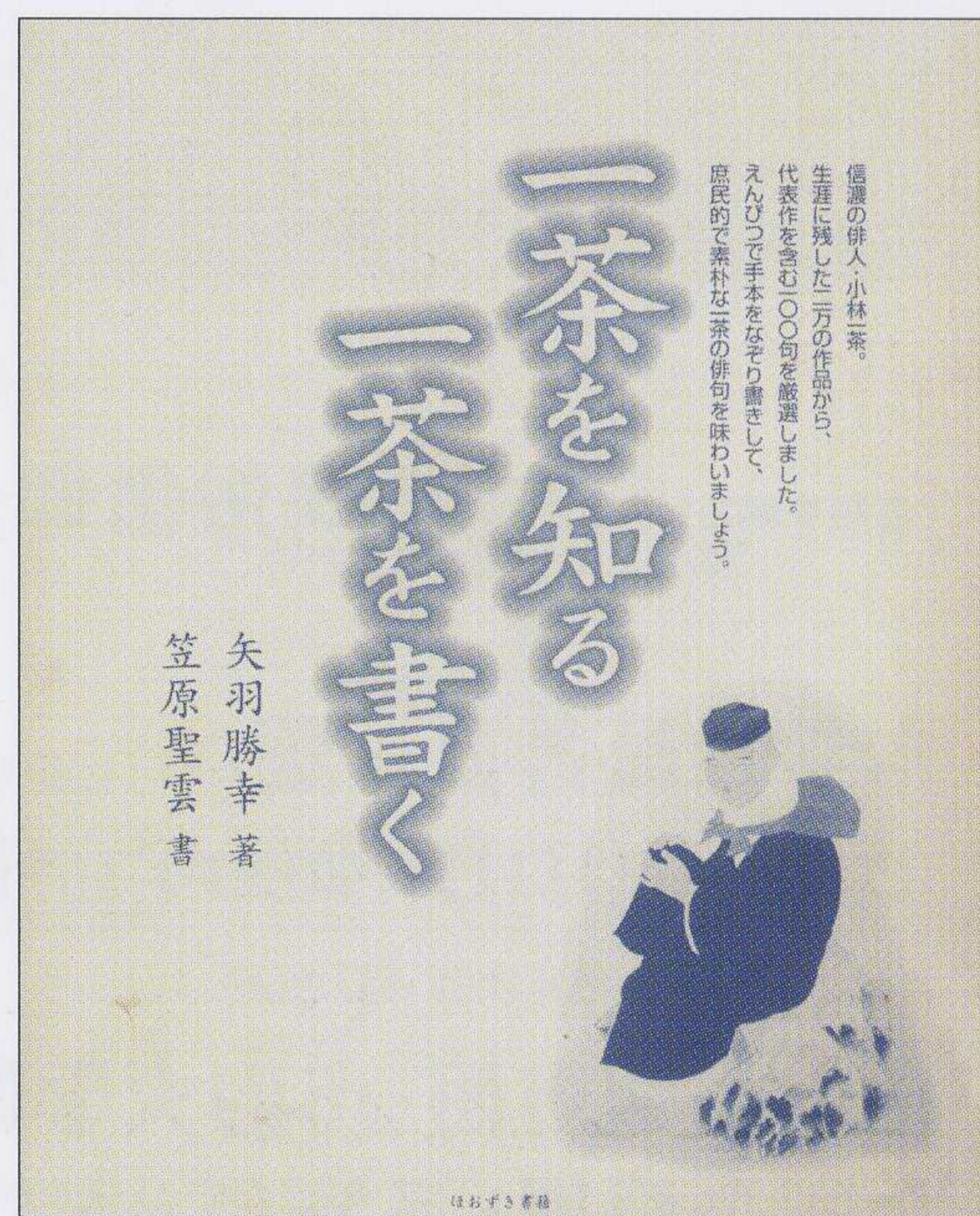
うに一日でも長く生きようというもの（いずれも不自然な望み）でもなく、阿弥陀仏がお迎えに来るまで自然にあるがままに生きようというものであった。一茶の理想とするところは、常に、「自然体」である。その理想からすると、歳末の大掃除も正月の門松も不自然そのもので一茶にとって意に介さないことだったのである（我々の正月といかに異なることか）。

さて、「門松立てず煤はかず」は、一茶だけの特別行為ではなかった。一茶の深く信仰した親鸞も伝えるところでは、門松も大掃除もしなかったといわれる。一休も深草のげんせい元政もその壁書によると同様であったという（饗庭篁村にあえばこうそんよると正しくは元政ではなく浮世草子作者月尋堂げつじんどうであったという）。博識の一茶はもちろんそんなことは承知していたことであろう。しかし、私は直接には師・二六庵竹阿にろくあんちくあの影響が大きかったのではないかと思う。竹阿が天明六年（1786年）刊行した『はいかい友の春』に「閑居／門松立ず餅つかず」と題して、

草の戸に春は来にけりふき とう落の臺 二六庵

の一句を載せている。一茶は師の思想を熟知していた。

さて、一茶句の「ちう位」とは、前文に拠る限り「中位」、信州方言でも何でもなく、前文の、不自然に長寿を望んだり、反対に自殺に近い行為をすることではなかった。与えられた寿命を素直にそのまま十分に生き切ることであった。それが「ちう位」の正しい読みである。一茶は巷間“奇人”などと言われているが、その根拠をたずねてみると案外“自然”を大切に人であったことが知られる。



矢羽勝幸 著
笠原聖雲 書

人生に於ける三つの出会い

名誉教授 青山 忠一

人は社会生活の上と、精神生活の上で、それぞれ三つずつの出会いがある。社会生活上の第一は良き師匠との邂逅であろう。生涯に師として尊敬師事できる人と巡り会える倖せは譬えようもなく有難い。そして第二は良き友人である。第三は善き伴侶だ。然しこれらは縁乏しく、遂に生涯そうした人との出会いのない人生もないわけではない。それでも人間は立派に生きて行くことが出来る。

また精神生活上、第一に書物乃至思想との遭遇がある。次いで生涯を託す仕事との出会いであろう。時に転々として種々の職を閲し、天職を求めて放浪の生活を余儀なくせねばならぬ人もある。しかし、臆ていつかこれぞ天与の業として納得し得る仕事に就くことが出来るものだ。むしろその間の転変こそ後の豊穰を齎らすかも知れぬのだ。そして第三に仕事とはまったく別の分野で、仕事に基づく重圧や苦難から離れ、その開放や慰藉のための趣味との世界を築くことになる。これは単なる逃避や怠惰ではなく、寧ろ新たなる創造の為であり前進なのだ。これこそ他の動物達が行なう本能的な生命活動とは別次元の営みなのだ。

私は双生児の片割れとして、昭和四年三月に九百瓦の虚弱体質をもって誕生した。弟の孝二は三日目に亡くなり、小学四年の秋には医者からあと半年の命と宣告されていた為、常に死と共に生を考える生活を余儀なくされていた。五年生の頃から仏教雑誌『大法転』などを拾い読みし始めていたが、中学三年生の夏休みに、たまたま田中智学氏の解説による『法華経魂魄』なる「妙法蓮華経・如来寿量品・第十六・自我偈」を読んだ。この衝撃的な出会いによって、それまでの断片的で恣意的興味本位の仏教知識は一挙に体系的組織的なものになる契機を得たのだ。この本に邂逅した事はそれまでの一切の疑問や誤解の総てを氷解させる力をもつものであった。その喜びは、正に手の舞い足の踏み処を知らぬ、と云った感激を齎らしたのである。その後岩波文庫の法華経全三巻を読み通すことが出来たのは、漢訳と並ぶサンスクリット語訳のお蔭げであったと思う。

釈迦が菩提樹下の冥想の末に到達した阿耨多羅三藐三菩提は単に自らの諦りに止らず、種々の方便を以って一切の衆生をそれぞれの機根に応じて済度する決意を表明し

たものである。然し人々はその慈悲の力に安緒し、甘え、精進を怠る故に、態と時に涅槃に入り、不安と憧憬の念を喚起させるのだと説くのである。恰も父親が、病いに苦しむ息子に良薬を与えようとしても、これを抗む時は、一旦他国へ去り、謀って父の死を仄聞せしめ、後悔と渴仰の心を起こさせる、と云った方便を用いるのだと教えているのだ。

最初からある種の宗教団体に所属し、ある種の教義だけを信奉する愚を諭して、釈迦は常に「自灯明・法灯明」と説いていることを忘れてはなるまい。

中学四年で第二早稲田高等学院へ入学し、早大仏教青年会に所属して七年間、鎌倉円覚寺へ通い、朝比奈宗源師に独参を許されたのに伴い、「無門関」「臨濟録」「碧巖録」「正法眼蔵」など禅の語録に親しんだのもごく自然ななり行きであった。それ故にこそ当時よんだ「バイブル」や「コーラン」「共産党宣言」にも比較的冷静でいられたのである。

しかし、文学部国文科へ進学し、元々作家志望であった素地もあって、江戸文学の権威暉峻康隆教授との出会いによって点火された近世文学研究への燈火は次第にその力を増すことになるのであった。学部の卒業論文は『日本永代蔵』であり、大学院では近世文学の全貌を鳥瞰するものであった。そして縁あって教鞭をとることになった駒込高校の十四年間に十五本の論文をかき、その『近世前期文学の研究』が契期となって横浜のフェリス女子大の講師となり、次いで二松学舎の教師となるのであるが、駒込の十四年間、すでに廃屋化していた旧天台宗中学時代の図書館で埃にまみれた蔵書を片端から読み、天台学の基礎を学び得たことをが後の『近世仏教文学の研究』の土台になったのである。私の学位論文『仮名草子女訓文芸の研究』が吉原の遊女教育を軸としている事を考えると、この硬軟両極の読書こそ、人間の、書物と人物との邂逅の不可思議を象徴するものであったと言えよう。

名誉教授 齋藤 喜代子

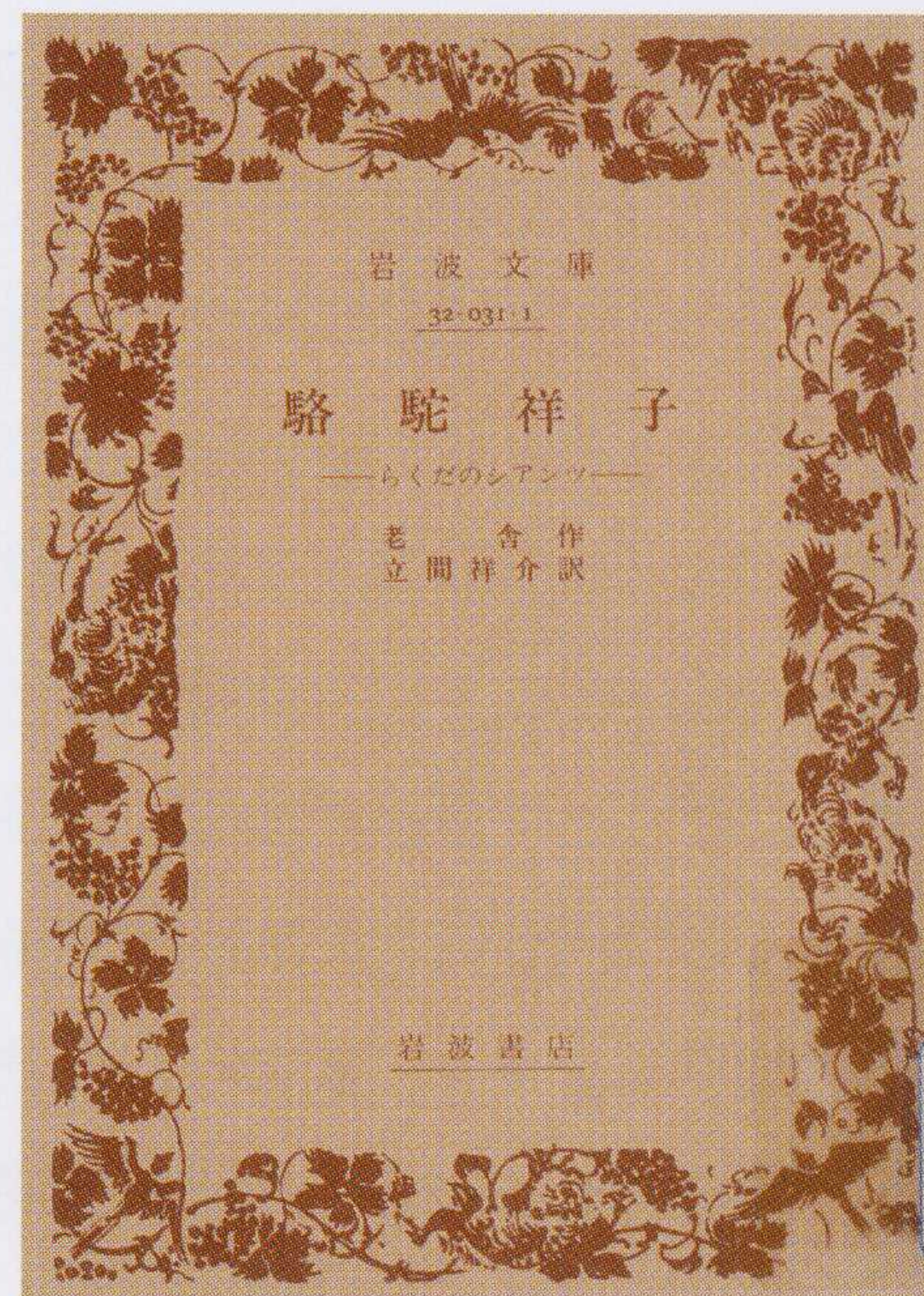
中国の小説の淵源は古い。その変遷をたどれば、いかな弁舌を以てしても優に一年間の講座時間は潰えてしまうであろう。その重厚な文学遺産を背負って、中国の文学が一大変革を遂げる時代が到来する。いわゆる五・四文学革命(1919年)である。以来、作家たちは積極的に国家・社会の問題と渡り合うが、厳しい弾圧のもとにその活動は停滞、後退を余儀なくされる。が、こうした苦悩は却って作家たちを成長させ、やがてのちに1930年代文学と称される豊饒な作品世界を形成するに至る。私がいまここに取り上げようとする一冊の本『^{ロートシャンツ}駱駝祥子』こそは、まさにこの時期に生まれた傑作である。作者は^{lao she}老舍(1899~1966)満州旗人の末裔で、北京の街の裏長屋の隅から隅まで識り尽くしている偉大なる苦勞人、そしてあの文革の犠牲となった舒慶春その人である。それにしても、中国の庶民階層の息吹をこれほど克明に、親密に、しかも流暢な北京口^{ロー}語で語ってくれた作品が他にあるだろうか。ところで、^{トシャンツ}駱駝祥子というこの奇妙な名。先ず“祥子”についてだが、これは満州語の原名を漢字で表したもので、その第一字を姓のように用い、それに「子」という接尾辞を付けたもの。落ちぶれた満州旗人の間で行われた呼び方だという。では祥子は満州旗人の血をひくかということそうではない。彼は田舎に生まれたが両親の死後僅かな田畑を売って、18歳のとき北京に出て来たというだけで出生についての詳しい説明はない。

次に“駱駝”というこの呼称。それは、北京に出て来た彼は真面目一筋に人力車を引いていたのだが、ある日突然、車もろとも兵隊に拉致されてしまう。が彼は隙を見て脱走し、そのとき陣営にいた三頭の駱駝を失敬し、途中でそれを^{らくだ シャンツ}売り払い再び北京に戻って来る。以来、彼は駱駝の祥子と呼ばれたというのである。彼は背が高く筋骨たくましい立派な体格だった。が生来、口が重く、しゃべるのが苦手です。いつも黙っていたので馬鹿か利口かわからなかった。彼には一つの希望があった。同じ車夫でも貸し車を引くのではなく、何としても自前の車を引く颯爽たる車夫になることだった。そのために彼は酒も煙草も賭博にも手を出さず、雨の日も風の夜も北京の街をひた走りに走り回った。かくしてちょうど三年目、彼はついに自分の車を手に入れたの

だが、その車が兵隊に略奪されてしまったのである。飯を節し、茶を節し、汗、汗、汗、幾十万滴の血のような汗を流し、歯をくいしばってやっと手に入れた自分の車！祥子は泣いた。が彼は再び貸し車を引いて再起を図った。

しかし事は順調には運ばなかった。車宿の一人娘で^{フーニャン}虎娘という、男か女かわからぬような女に翻弄されてついにその身を奈落の底に落してしまう。虎娘は強引に祥子の女房となったが、腹の中に子を抱えたまま悶死した。もう、^{ひと}どうとでもなれ！努力が何になる。人間の幸福は無関係だ！彼は絶望した。が、絶望に疲れはてたとき、ふっと彼の頭の中を一筋の光のようなものが走った—^{シャオフーツ}小福子、この貧民窟の一隅で身を売りながら幼い弟たちを養っていた優しい美しい女性。女房にするなら彼女のような、と祥子がかねてより胸の中に秘めていた存在である。彼は小福子を探した。が、彼女は淫売窟でとうに首を吊って死んでいた。人は何のために生きるのか。考えたって無駄なんだ！希望なんて持つ必要はないんだ！そこにはもはや往時の、あの颯爽たる祥子の面影は求められなかった—と。

この救いようのない暗黒の社会に希望というものを見^{てだて}出す手段はないのか。中国の30年代文学が“覚醒”を道標として苦闘しなければならなかったその土壌を『駱駝祥子』は見事に炙り出している。名作は時代を超える。魯迅をはじめとするこの時期の硬質の文学と併せて読んだならば、中国近代文学に対する認識は一層深められるであろう。私が是非読んで欲しいと願う一冊の本である。



文学研究科
国文学専攻 教授 竹野 静雄

本書は、『好色五人女』のモデルの史実とその伝承、また物語の要所と受容史を辿りながら、主に恋の有りように焦点を当て、新見を加え、その魅力を述べたものです。あえて「恋の万華鏡」としたのは、そこにさまざまな身分・階級・年齢にわたる多彩な恋の絵模様があるからで、実る恋、裂かれる恋、ゲーム型の恋、片思い、不倫、そして男性同性愛まであります。

恋の絵模様の焦点は何かといえ、おのずと恋人たちの心情と行動になります。どんな相手を好きになるのか、恋する心の動きと求愛行動、恋人たちのやりとり、恋の進展、愛のかたち、といったところがその中心です。そこに恋愛論や心理学の知見を援用して、幾つか新解釈を施してあります。

精神的で平等な男女関係、というのが西欧からもたらされた恋愛観ですが、この見方によって、近代以前の「色恋」は手きびしく批判されてきました。情痴小説はあるが恋愛小説はない、男女の対等など誰も主張していない、近世の文化にはどこにも男と女の対等な関係性は読めない、等々。翻って、「みずから男性を愛する恋愛主体としての女性の出現」は、平塚らいてうらの青鞥派からだということです。

しかし、『五人女』には対等で主体的な恋愛関係(対称的コミュニケーション)が充満していて、それぞれ「みずから男性を愛する恋愛主体としての女性」物語の感さえあるのです。これが現実にはたぶんありえないことをあえて描いた、可能態の物語としての新しい形成といってよいでしょう。

お七・吉三郎。逢いたい一心で彼の寝間に忍ぶお七と、村の子に変装して彼女に逢いに来る吉三郎とは、その心情と行動において、ほとんど対称的です。そもそも思い合う仲となったのは、互いに手を握り合ってからです。恋文が行き交い、いつしか「互に」「恋人恋はれ人」となる。そして「心の程を互いに書いて見せたり見たり」、「袖は互に、限りは命」と愛を誓います。

お夏・清十郎。「瞋恚(愛欲の炎)を互いに燃やし、両方恋にせめられ」「心の通ひ路に」「やうやう声を聞きあひける」。やがて「両人鼻息せはしく、胸ばかりをどらして」契る。駆け落ちに失敗して捕まると、清十郎は何よりお夏の安否を気遣い、お夏も「同じ嘆きにして」明神に彼の命乞いをす

るのです。

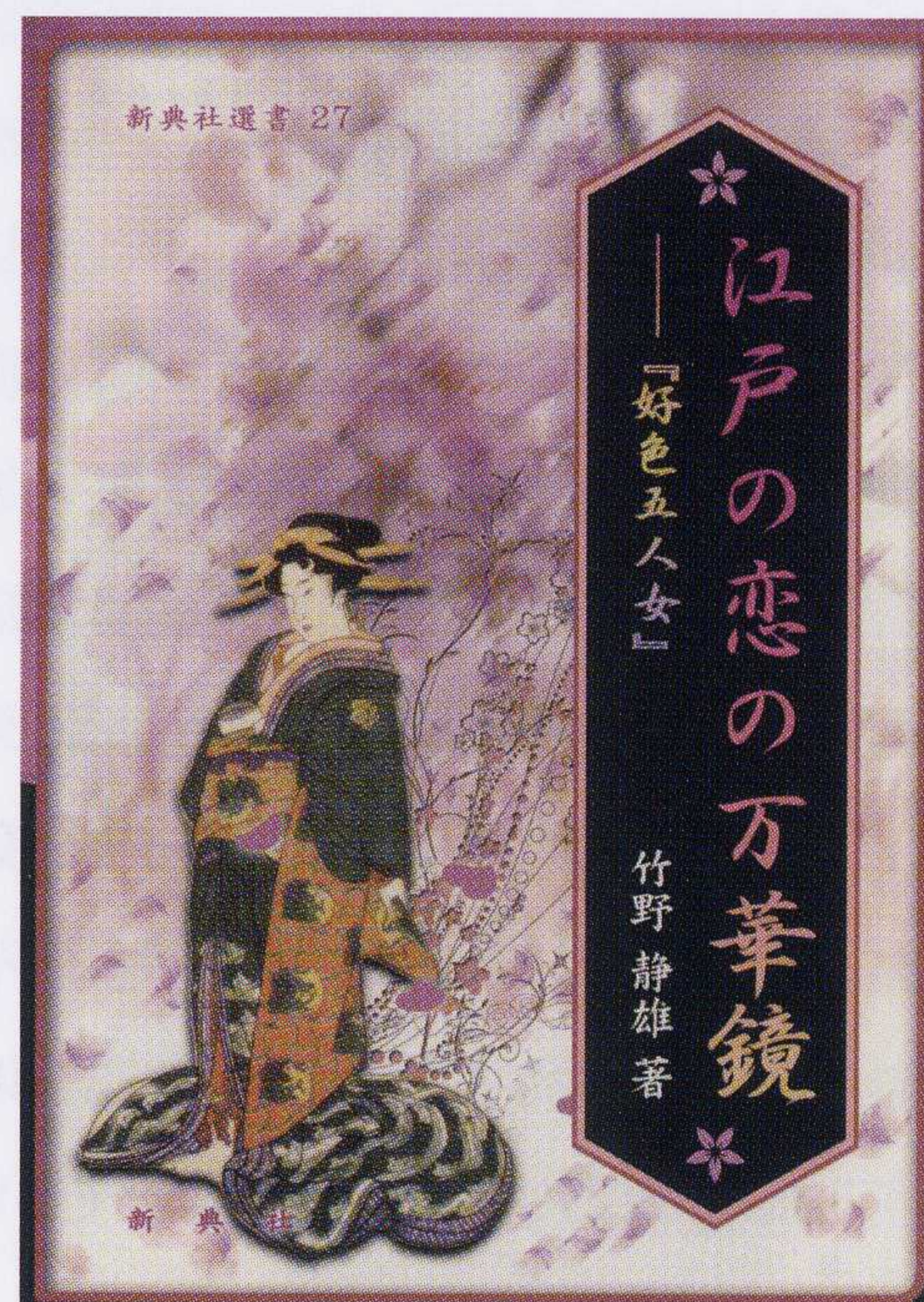
おまん・源五兵衛。家を捨て、人目を忍んで結ばれたものの、たちまち暮らしに行き詰まる。折りから「互に」相談のうえ大道芸人となり、対等・対称的な所作に励む。運命共同体としての夫婦関係を維持しようとして、ともに育てた愛のかたちです。

おさん・茂右衛門。恋の逃避行に及んで、つどつど身の振り方を相談し、歩調を合わせる。互いに励まし、ときに気を静めて苦境を打開し合う、まったく新しい関係性を築くのです。

樽屋・おせん。波乱の果てに結ばれた二人は「相性よく、仕合せよく」、共働みに精を出す。おせんは二児の母となっても、なおなお夫を大切にする。全体おせんの態度には、気くばりと理解・尊敬・責任—E・フロムのいう愛の要素が鮮やかに現れています。

こうした恋愛関係こそが、日本文学における新しい愛のかたちの内実なのです。

ところで、物語の目的は事実の真偽のレベルを越えた「大きな真実」の伝達にあるといわれます。では、この物語の大きな真実とは何か。まず男女の心が互に通えば、親といえどもそれを制することは難しい。それどころか恋は身分も階級も年齢も選ばないということです。他方、変わりやすきは人心、^{ひとこころ}わけても恋によって人は劇的に変わること。もっといえば、事と次第によって、人は何をしでかすか分からないということ。『五人女』はまさにそのことをげざやかに描いているのです。



文学部
国文学科 教授 谷口 貢

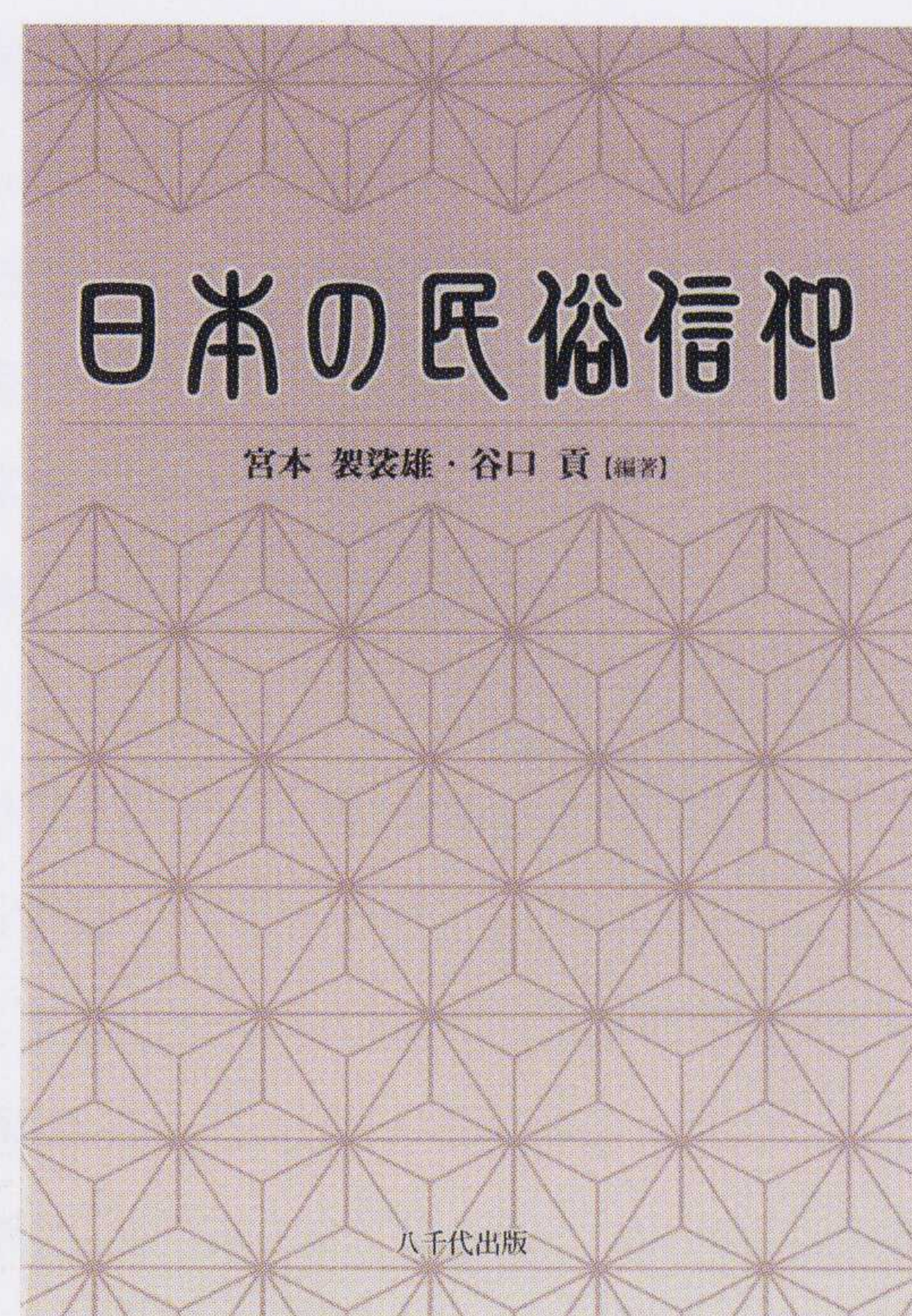
自著を語るといっても、今回紹介する私の本は共編著である。書名を「日本の民俗信仰」としているように、私が専門とする民俗学の立場から、日本の民俗信仰について基本的な事項を体系的にわかりやすく提示しようとしたものである。ここでいう「民俗信仰」とは、地域社会の人々の生活文化に密着する宗教（信仰）現象であり、自然界の事物に靈的存在を認めるアニミズム的信仰をはじめ、シャーマニズム（巫俗）、祖霊信仰、神社信仰などが、原始・古代から今日にいたるまで歴史的に累積され、仏教や修験道・陰陽道などの体系化・組織化された成立宗教との多様な交渉を通して変容・変質を遂げながら伝承されてきたものである。具体的にいえば、盆や彼岸の墓参り、神社の祭り、霊山への登拝、巫女の託宣儀礼、葬送儀礼、地藏信仰、観音巡礼などは、すべて民俗信仰と深い関わりをもって展開しているといえる。また、日本社会では、子どもの初宮参りや七五三には神社にお参りし、結婚式はキリスト教の教会で行い、人が亡くなると仏教の僧侶に読経してもらう、といったことはよくみられることである。しかも、それを行う多くの人々が、神道やキリスト教・仏教などをとくに信仰しているわけでもないということである。こうした日本人の多様な宗教との関わり方を理解するためには、民俗信仰の解明なくしてはむずかしいのではないだろうか。

民俗信仰の研究は、民俗学をはじめ宗教学、社会学、文化人類学、歴史学などの諸分野から関心をもたれてきたテーマである。民俗信仰と共通する用語としては、固有信仰、基層信仰、庶民信仰、民衆信仰などが用いられることもあるが、最も広く使用されてきたのは「民間信仰」である。民間信仰は、英語のfolkbelief、独語Volksglaubenの訳語とみられ、明治以降、学術用語として用いられてきた。その後、1970年代に民間信仰の研究が、仏教や修験道・陰陽道・新宗教などの成立宗教と民間信仰との交渉の具体的な様相を追究しようとする指向が強まる中で、1980年前後から民間信仰に替えて「民俗宗教」という用語が使用されるようになった。しかし、この「民俗宗教」の捉え方には、成立宗教に比重をおいて民俗宗教を研究しようとする立場と、民俗や習俗の視点に立って民俗宗教を研究しようとする立場には、埋め難い溝が横たわっていることも確

かなのである。そこで、本書では、従来の「民間信仰」の意味合いを継承しつつ、「民俗宗教」の研究において議論されてきた問題点をふまえて、「民俗信仰」という用語を積極的に採用することにした。民俗学における信仰分野の研究を再構築したいという意図を含めたものであるが、本書の問題提起が学会でどのように評価されるかについては今後を見守ることにしたいと思う。

本書の内容は、「民俗信仰の多様性と重層性」「民俗信仰研究の歩み」「家の神信仰—屋敷神と屋内神—」「なりわいと民俗信仰」「通過儀礼と民俗信仰」「講と小祠の信仰」「神社祭祀からみた民俗信仰」「仏教と民俗信仰」「山岳信仰と社寺参詣」「宗教的職能者と民俗信仰」「巫女とシャーマニズム」「俗信と心意現象」「現代社会と民俗信仰」「沖縄の民俗信仰」「華僑・在日朝鮮人と民俗信仰」である。15名による分担執筆であり、私が担当したのは、「民俗信仰研究の歩み」と「巫女とシャーマニズム」の2章である。

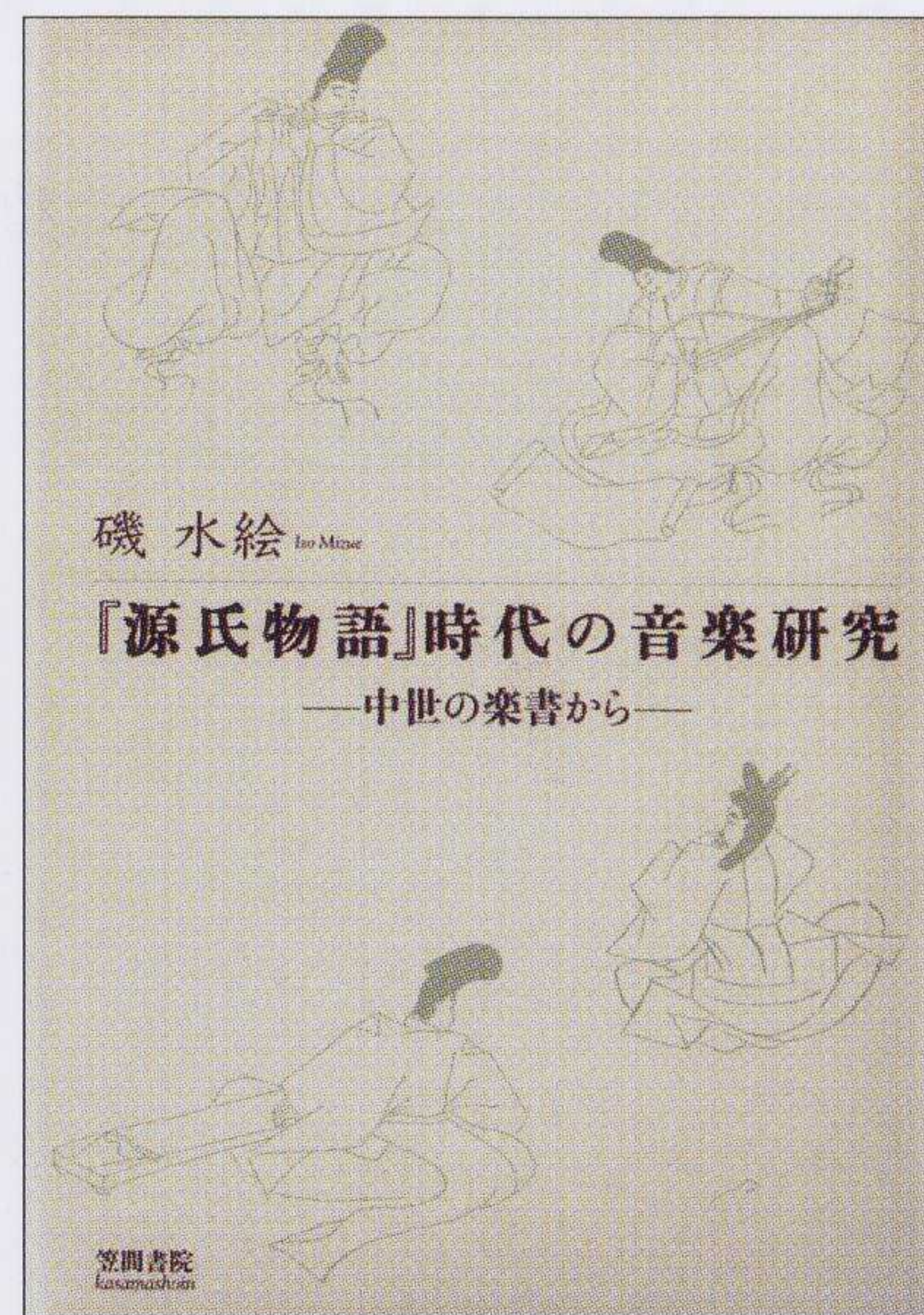
本書の共編著者の宮本袈裟雄氏は、近世以降、村や町などに定着して宗教活動を行う「里修験」の先駆的な研究を推進した民俗学者として知られる。私が大学院に在籍していた頃からのつきあいで、民俗調査や研究会、学会などでお世話になった。本書が刊行される半年前の平成20年12月、ご病気のためとはいえ、63歳という若さで逝去された。そのため、「まえがき」には宮本氏への追悼の一文を書いて、本書をご霊前に捧げることになった。



本学教員著書一覧(2008年11月1日~2009年10月31日受入分)



- 五井 信 著
- 勉誠出版
- 2008年11月
- 2,000円

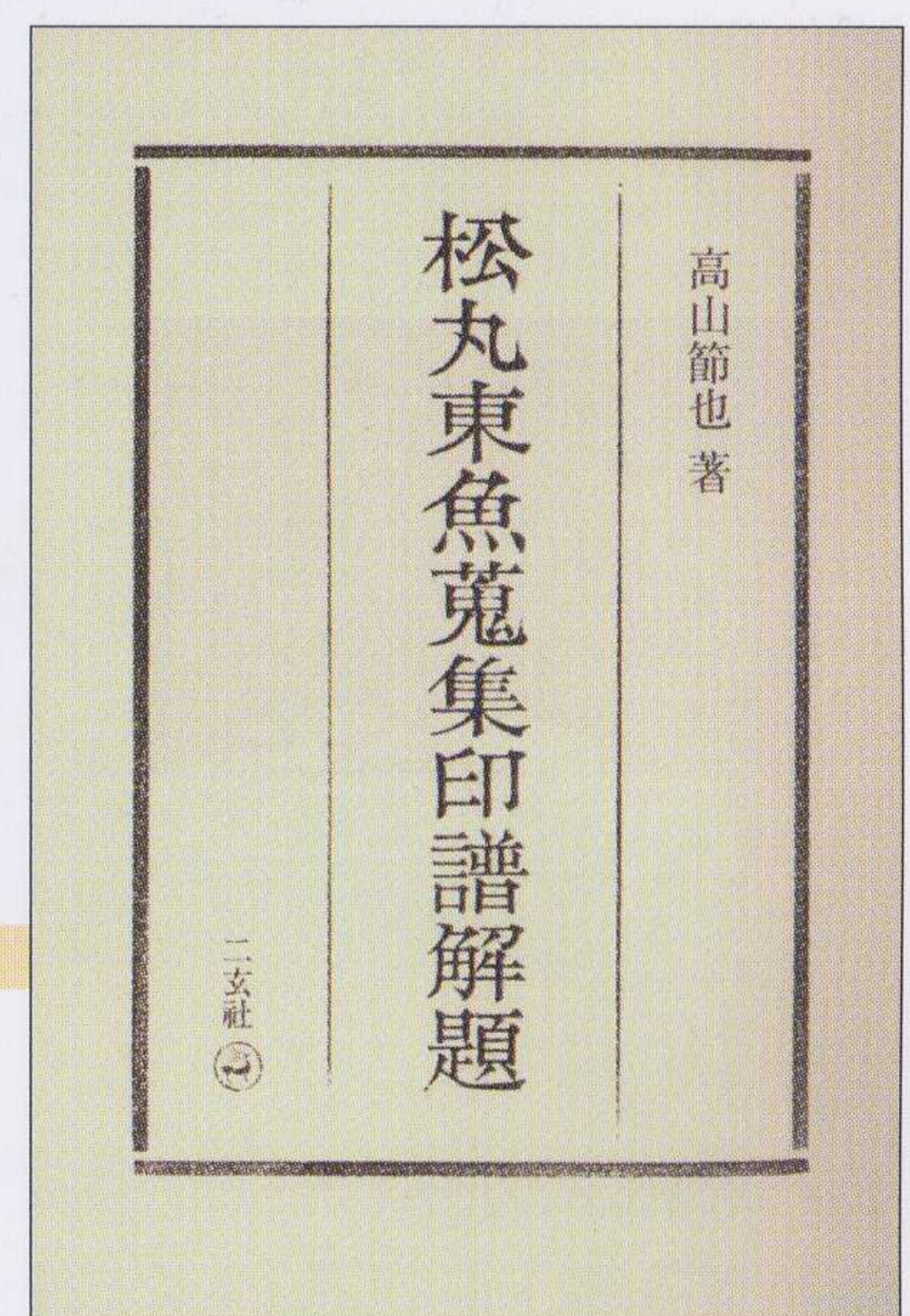


- 磯水絵 著
- 笠間書院
- 2008年12月
- 12,500円



- 武永 尚子 共著
- センゲージラーニング
- 2009年1月
- 2,500円

- 高山 節也 著
- 二玄社
- 2009年1月
- 12,000円

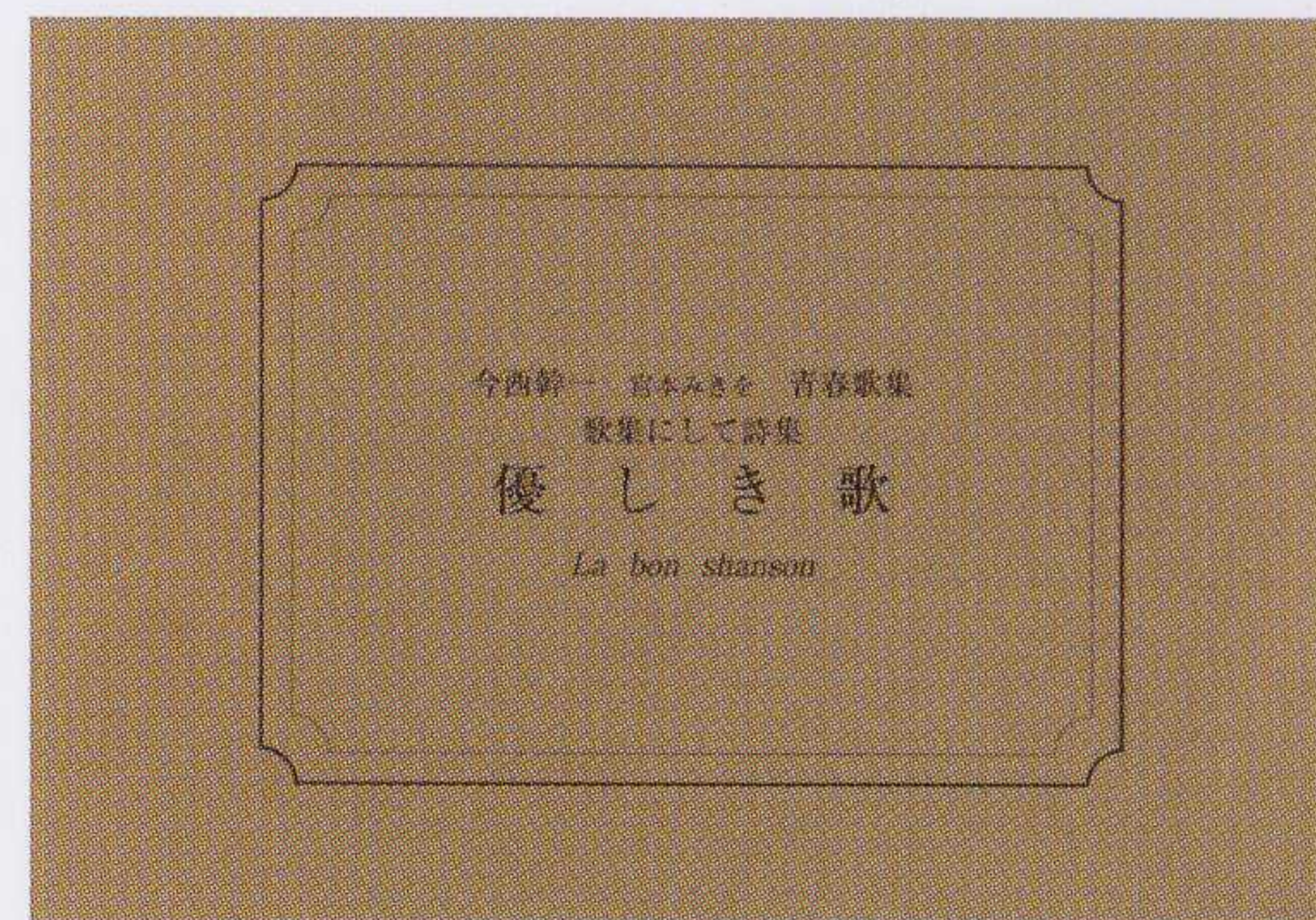


日本文化文学
人物事典

[編集]
志村有弘
針原孝之

鼎書房

- 針原 孝之 編
- 鼎書房
- 2009年2月
- 4,500円

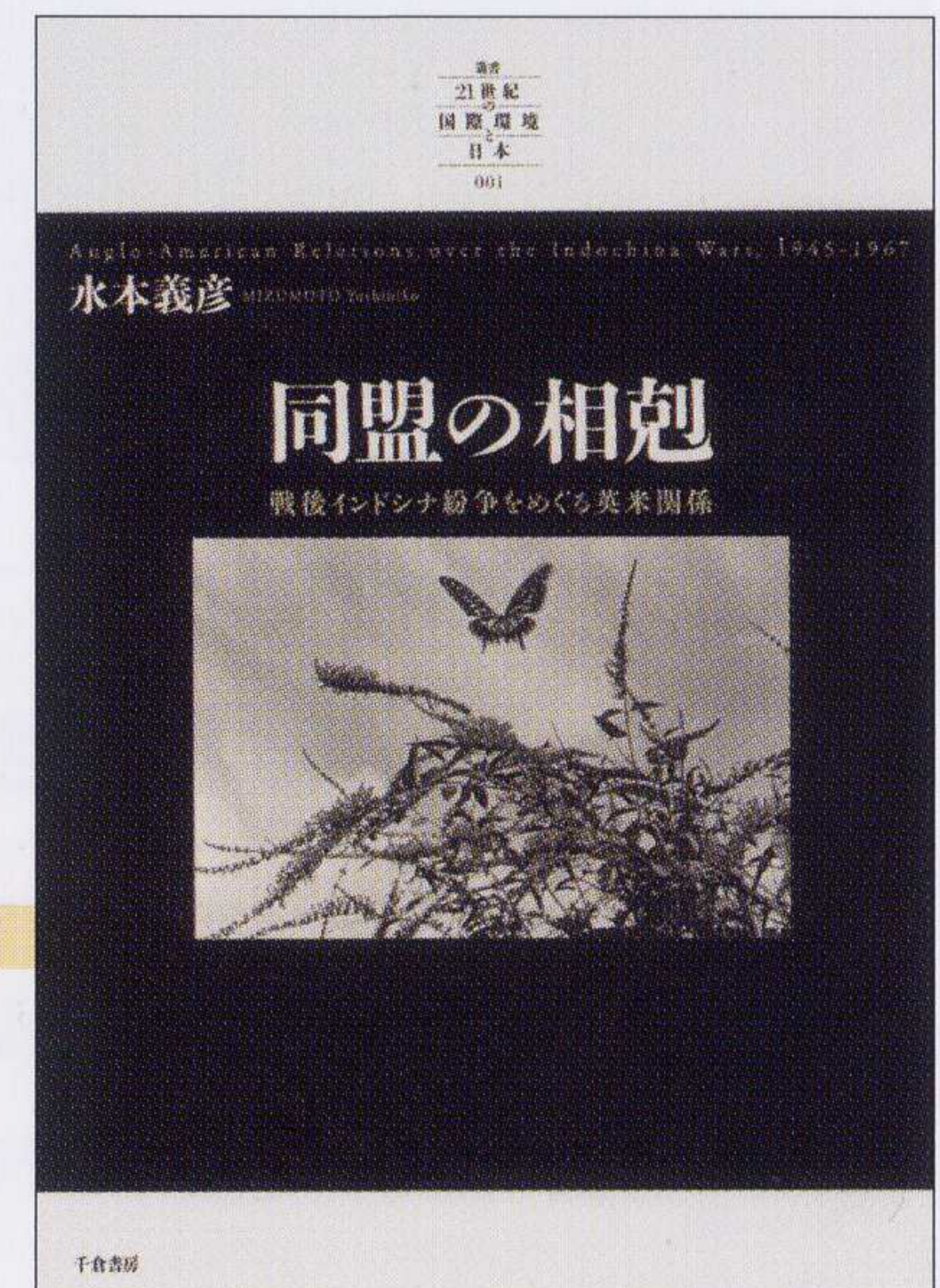


- 今西 幹一 著
- 自費出版
- 2009年2月
- 1,000円

- 江藤 茂博・山口 直孝 著
- 戎光祥出版
- 2009年4月
- 2,400円



- 水本 義彦 著
- 千倉書房
- 2009年10月
- 3,800円



※竹野静雄『江戸の恋の万華鏡—『好色五人女』』及び谷口貢『日本の民俗信仰』は〈自著を語る〉に掲載。

柏市立図書館・市内大学図書館合同企画展・講演会

《企画展》



10.15
平成21年(2009年) No.1347

日本橋学館大学図書館 ●所在地: 柏7225-6

企画展 日本橋と柏の深～い関係

10月24日(土) 25日(日) 午前9時～午後5時

10月24日(土) 午前10時～午後0時30分

10月24日(土) 午前10時～午後0時30分

10月24日(土) 午前10時～午後0時30分

二松学舎大学附属図書館(柏) ●所在地: 大井2590

企画展 和への誘い

10月19日(月)～31日(日) 午前10時～午後6時

10月19日(月)～31日(日) 午前10時～午後6時

10月19日(月)～31日(日) 午前10時～午後6時

読書の秋を楽しもう

市内大学図書館との合同企画展・講演会

市立図書館(本館)

企画展 ALWAYS 私とまちのものがたり

10月18日(土) 15時～18時

10月18日(土) 15時～18時

10月18日(土) 15時～18時

麗澤大学図書館 ●所在地: 光ヶ丘2丁目1-1

企画展 昭和初期の野田蘭池(現キッコーマン)における労働争議関係資料展

10月20日(火)～30日(土) 午前10時～午後5時

10月20日(火)～30日(土) 午前10時～午後5時

10月20日(火)～30日(土) 午前10時～午後5時

東京大学柏図書館 ●所在地: 柏の葉5丁目1-5

企画展 「かわら版・絵巻にみる江戸明治の災害情報」

10月27日(日)～11月2日(金) 午前9時～午後5時

10月27日(日)～11月2日(金) 午前9時～午後5時

10月27日(日)～11月2日(金) 午前9時～午後5時

柏・九段校舎図書館合同企画

秋の読書週間キャンペーン

10/27(火)～11/9(月)

読書の秋です！図書館では読書週間に合わせてキャンペーンを開催いたします。みなさま、どうぞご利用ください！

☆柏図書館企画☆

- 「大学読書人大賞」2008・2009年各ベスト5の展示
- 本を愛するサークル「文芸愛好会」「児童文学研究会」「文芸サークル山猫」「推理小説研究会」「散文サークルゆるま湯」各メンバーお薦め本の展示

☆九段図書館企画☆

- 「もっとすごい！このミステリーがすごい！」より、過去20年間のミステリーベスト10(海外版はベスト3)を展示
- 文豪が書いたミステリー特集

☆キャンペーン特典☆

期間中、本を借りた方、先着100名さまに人気イラストレーター・石川ともこ氏がキャラクターをデザインした特製ビニール袋をプレゼント！！

さらに・・・

3冊以上借りると、二松学舎大学オリジナルグッズをプレゼント！！

(貸出シートをカウンターへお持ちください。プレゼントは、グッズがなくなり次第、終了となります)

展示本はすべて貸出し出来ます！

たくさんのご参加お待ちしております！！

《講演会》

合同企画展協賛として、講演会が柏校舎で開催された。講師は本学文学部山崎正伸教授で、題目は「平安朝の恋歌」。『古今和歌集』巻11・13・14・15、『後撰和歌集』巻9・11・14、『拾遺和歌集』巻11・12・13・14・19に載る恋歌を題材とした1時間半の講演会であった。

この合同企画展協賛の講演会は、昨年度に引き続き2回目で、多くの方々が参加した。



表紙資料解説

『百人一首かるた』

『百人一首かるた』は、藤原定家撰と言われる「小倉百人一首」を使ったもの。江戸時代中期頃から一般化し、現在に至っている。江戸時代後期作。木版筆彩。

二松学舎大学附属図書館 季報 第75号

発行日 平成21(2009)年12月15日
発行 二松学舎大学附属図書館
九段校舎図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
電話:03-3263-6364
柏校舎図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590
電話:04-7191-8758
印刷所 株式会社 サンセイ
電話:03-5614-2515